

これはある意味愛かもしれない

「まったく、毎晩ぶっ挿してやってるってのに、俺だけじゃ不満ってことか？」

「ん、う……、別に、そんなつもりじゃね、え……、あ、ああっ……」

家に帰るなり、不機嫌そうな充電器に組み敷かれ、俺は声をあげた。

スマホの俺と充電器は別に恋人同士というわけではない。けれど、俺にとって充電器は必要不可欠な存在だ。俺の身体は特殊な構造になっている。毎日、とまではいかないが、定期的に充電器に抱かれないと目を開けることすらままならない。充電器が俺の中に出す熱が、俺のエネルギーとなっているからだ。

充電器はこここのところ機嫌が悪い。はじめのうちには原因がわからなかったのだけれど、最近になって充電器が不機嫌になる理由に気がついた。

「昨日、俺が満タンにしてやったのに、外であいつとやったんだろ？」

「だ、だって……、主人が、うあつ……、ちょ、熱いって……」

——そんなこと言ったって、俺にはどうしようも……。

充電器がイライラしている理由。それは、最近主人がハマっている音ゲーのせいだろう。

もともと主人はハンズフリーが好きで、無線タイプのイヤホンを使用していた。けれど、知人に勧められたゲームにハマりだし、無線だとラグが発生するとかで、有線タイプのイヤホンが新しく家にやってきたのだ。

「チツ……、毎日あいつと出て行ってんじゃん」

「そんなの……、俺のせいじゃな、ああつ……」

心当たりは、ほかにもある。

俺はいつも主人とともに家を出る。今までは俺一人だったけれど、今はイヤホンも一緒だ。つまり、みんなが家の外にいる間、充電器は家で留守番しているのである。

「だいたい、あいつはお前を疲れさせるだけなのに」

充電器のいうとおりだ。

充電器に抱かれると俺は元気になる。けれど、イヤホンは違う。イヤホンは口を塞いでくるから、正直言って俺も疲れる。けれど、俺たちは主人の持ち物だ。使うタイミン
グは主人が決める。俺にも、充電器にも、もちろんイヤホンにも、誰にも決定権はない。

『そろそろいいかな？』

充電器に繋がったままの俺を手に取り、主人が呟く。ほとんど同時に、チャラついた
声が聞こえた。

「はろー。お楽しみのところ悪いね。ああ、下の口は充電器にまかせるよ。俺はこっち専
門だから」

「んぐっ……、っ……、う……」

イヤホンを遠慮なく突っ込まれ、くぐもった声が出た。

「ちよ、おい！ こいつまだ回復してねえから！」

「えー。そんなこと言ったって、しょうがないじゃん。回復すんのはあんたの役目でし

よ？ 俺は、スマホの声をこの線で主人に届けんのが仕事なの」

イヤホンのいうことは間違っではない。

充電器は俺を回復させるのが仕事で、イヤホンは俺の声を届けるのが仕事。間違っではないのだけれど、完全に回復しきっていない身体で熱を受け止めて、声を出し続けるのはきついものがある。

「う……、っ、ふっ……」

イヤホンが繋がれている今、俺は何も話すことはできない。当たり前だ。口をめいっばい塞がれている。

「はあ？ んなことわかってるよ！ 俺はただ、せめて回復するまで待つてやれって言っただ」

「同時にヤツたら、スマホが熱を出すだろう」と充電器が言う。けれど、イヤホンはお構いなしだ。ガチャガチャと激しい声を出さされる。おまけに、コンコンと主人に身体を叩かれた。